

日比谷松本楼：承前啓後、先人の跡を引き継ぎ、将来の道を開く

中国人民大学学生代表

見学日時：2019年6月3日（月）12:00-13:30

見学場所：日比谷松本楼

見学概要

2019年6月3日の午後、第24回「走近日企・感受日本」代表団は日比谷松本楼を訪れ、美食を堪能した他、梅屋庄吉氏の曾孫である小坂文乃女史からの梅屋庄吉氏と孫中山氏の歴史的關係性についてのお話と共に、日中の青少年は両氏の友情と思いを受け継いでいってほしいとの願いを受け取った。そして最後に代表団は日比谷松本楼において記念写真を撮影した。

なぜですか？

問：昼食で食べたカレーライスにはどのようないわれがあるのか？

答：松本楼は西洋建築であり、創立当初は西洋レストランとして経営されていた。その当時、松本楼のカレーライスはとても高い評判を受け、各界の名士がこぞって堪能した。そして現在においてもカレーライスは松本楼を代表するメニューとなっている。松本楼はまた本場のフランス料理でも有名である。2008年には胡錦濤主席が福田元首相同行の下で松本楼を訪れ食事しており、その際に堪能したのがこのフランス料理とのことである。そのため私たちの昼食と当時の胡錦濤主席の食事には同じルーツが受け継がれている。



問：孫中山氏と宋慶齡女史はどこで結婚式を挙げたのか？

答：孫中山氏と宋慶齡女史の婚姻は中国では広く知れ渡っている美談だが、彼らがどこで結婚式を挙げたのかについては知る人は少ない。小坂女史の説明によると、二人の結婚式は梅屋庄吉の自宅で行われたとのことである。

当時、この婚姻には多くの人が反対していたが、梅屋夫人の仲介のおかげで二人は結ばれることになった。そして孫中山氏は梅屋夫妻への感謝を示すため梅屋庄吉氏の錦織に「賢母」の二文字を揮毫し、梅屋夫人への賛美の気持ちを表した。

松本楼は当時において非常にお洒落な名士が集う場所であり、孫中山氏と宋慶齡女史も松本楼を訪れていた。

問：孫中山氏亡き後、梅屋庄吉氏は中国のために何をしたのか？

答：孫中山氏が亡くなった後、梅屋庄吉氏は「非常に悲しく、悲痛・哀悼の極み」であった。彼は宋慶齡女史や孫科氏に、孫中山氏は「中国の革命における大恩人、そして世界の偉人」であり、孫中山氏の死去は「貴国の将来の見通しが立たなくなるだけでなく、日本にとっても不幸である」と伝えた。

そして梅屋庄吉氏は中国において孫中山氏の事績を広め、より多くの中国の人々に孫中山氏の偉大さを知らせる決心をした。そこで彼は様々な妨害を克服し、資金を集め孫中山氏の銅像を四体作成し中国に送り、それらは後人の見学や参拝用に南京孫中山故居記念館、広州黄埔軍事学校、広州中山大学、マカオ国父記念館に置かれた。梅屋庄吉氏はさらに『大孫文』というタイトルの映画の撮影を計画していたが、1931年の満州事変の影響で頓挫した。

「大アジア主義者」であった梅屋庄吉氏は、中国の独立革命運動に心からの同情と大きな注目をし、それらへの資金援助を行った。満州事変の後、日本は中国への侵略を始めたが、梅屋庄吉氏はそれに強く反対し、中国へ赴き平和斡旋活動を計画したが、残念なことにその出発を待たずに梅屋庄吉氏は1934年11月23日にガンで亡くなった。

感想

私たちは孫中山氏と梅屋庄吉氏との友情にとっても感銘を受けた。両氏は国や出身が異なっても同じ志によって強い友情を結んだ。両氏は出会ってすぐに中国、アジアそして世界について語り合うなど意気投合した。そして梅屋庄吉氏はその場で「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」との約束を交わし、その約束は生涯守られた。両氏は日中友好交流の先駆者であり、現在では梅屋庄吉氏の曾孫にあたる小坂文乃女史が曾祖父の精神を受け継ぎ、日中友好事業に尽力されていることに感動と尊敬の念を覚えた。

私は彼らの想いに感動した。孫中山氏と梅屋庄吉氏はその生涯において常に探求を続け、アジアの開放事業に尽力した。孫中山氏と梅屋庄吉氏が出会ったのはそれぞれ29歳と27歳の時であり、丁度立つべき年であった。彼らは人生の目標を国家やアジアの大地に打ち立て、人々の幸福と地域の平和事業のために奮闘した。そして正に彼らのように両国の平和への努力を続けた代々の若者たちのおかげで、私たちの今日の平和が存在するのである。現代の中国の若者である私たちは、より幅広い視野とともに広い心を持つ必要がある。視野を現実や生活から逸脱したもの限定するのではなく、承前啓後そして先人の跡を引き継いで将来の道を開き、日中の友好交流に積極的に関わり、共に平和を構築していくべきである。

孫中山氏の言葉に「人は皆平等であり、危難の際に互いに助け合うことこそ人としての正道である。もし世の中がそうならば、平和な世界はすぐそこである。」というものがある。この思想についてはその後『永大日記』において「世の中が世界は皆兄弟との文化的境地に達した日がつまり偏見のない日々の到来の時だと私は確信している。」とさらに発展している。彼らを模範として日中両国が友好的に交流し、偏見がなくなり、友情が結ばれ、共に平和を構築できることを願うと同時に、私たち自身もまたその実現のために微力を尽くしたいと思っている。